

居残り補習逆効果も

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(4)

④

本島南部のある小学校は1月から3月にかけて、学習が苦手な児童に放課後、居残りの補習を課した。2月の黒潮保護区入、4月の全国学力テストなどを兼ねた取り組みで、学習が苦手な子の底上げが狙いだ。

対象者の中には家庭環境が整わず、学習機会を確保できなかったり、宿題を忘れがちだったりする児童が少なからず含まれる。学校からの電話を取らず連絡が付かない家庭もある。

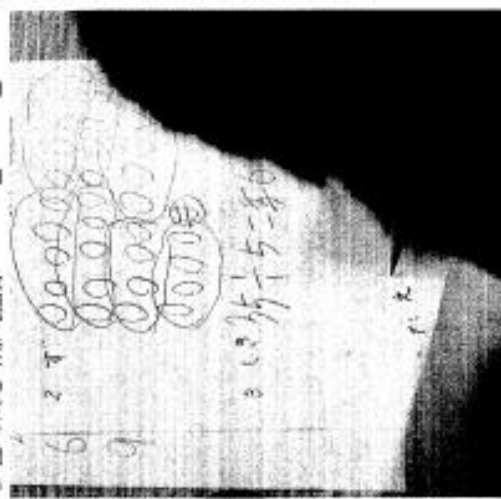
補習はプリント学習が中心。到達度テストの過去問題などを取り組ませ、教師が丸付けしながら指導した。理解が深い子には個別で教えたが、まだテストの成績に効果は表れていない。分からないところが理解できず、自信を失う子も出てきた。

「学校を居場所にしなれば」

がいる半面、やる気がなく学習に集中できない子もいる。放課後のスポーツクラブ活動がなくなり、と不平を言う児童も多かった。仲間グループの友達が増えず、一人での居残りしなくてはならない子は目立ち、意欲が低かった。「私にはどうせ無理」。そう言いつつ教室を飛び出していった子もいる。

指導に関わった40代の男性教師は「学習支援の重要性は認識しているが、本人のやる気が不可欠。学ぶ意味を感じていない」と。2月25日午後、学校を離れては居残りの補習を受けることもない。と実感する。一人一人さまさまな背景がある。子どもの気持ちを理解しながら、学ぶ意欲を引き出す工夫も必要だ」と。支援の難しさを語る。

本島南部の別の小学校で学習支援員を務める40代の女性は、宿題や提出物を忘れがちで困窮家庭の子を気づかしている。家庭学習ノートに保護者のサインや反応はほとんどない。「家がちゃんとしてくれない」。担任教師が泣き声の話をよく聞く。



小学校の補習で練習問題に取り組み子ども＝本島南部

「子どもたちと話したいことがいっぱいあって、よく話しかけてくれる。勉強を教えるのも重要だが、その前に子どもの声に耳を傾けることがもっと大事で

はないか」と問い掛ける。

那覇市内の40代の男性教師は「本来、子どもの学力保障は学校が担うべき仕事。だが子どもの貧困対策に学校の役割はあまり見えてない」と違和感を口にしている。行政が提示する授業は民間の学習支援や無料塾など「悪逆」の語が多い。「中心」のはずの学校が認められないことにも、もどかしさを感じている。

教材費や給食費、修学旅行費を支払えない子のため、立て替えたことが何度もある。毎半立って替える回数教師もいる。登校時や授業中、給食時間など子どもがサインを発している場面は毎日のようにあるという。